令和元年１１月１８日　つるつる会

⑩ 幻　の　鼓　様

吉備津宮縁起は、桃太郎の家来、猿に比定される留霊臣について次のように記します。温羅軍を迎え撃つ戦闘配備についていた時のことです。

尊ノ、鬼神ヲ追イ回シ給フヲ遙カニ見テ大イニ臆シテ恐レ戦キ、西北ニ飛ビ去ルコト三里余。周章止マズ大ノ谷ノ郷ニテ、持チイタル鼓ヲ田ノ中ニ打チ捨テ、高田ノ里ニ隠レケリ。尊、大イニ怒リテ、勘気ヲ令シ出仕ヲ赦サレズ。楽々森ニ命ジテ、大井川ノ此ノ方ニ入ラシメザリキ。

（尊とは、即ち吉備津彦命）

広面奥の風神社

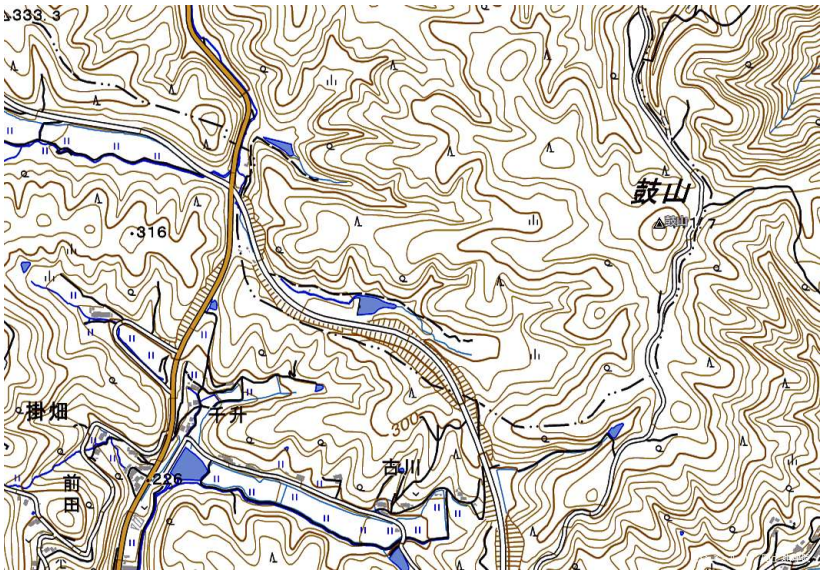
つまり、留霊臣は大井の谷へ持っていた鼓を投げ捨て、高田の里へ隠れてしまったというのです。

さて隠れた先は、高田ということから上高田の現在の鼓神社がその場所として想定されます。しかし、本当にそうであったのでしょうか。

話変わって、上高田の鼓神社から直線距離で北へ５．３ｋｍ、加賀郡吉備中央町広面奥１２６９番地、国道４２９号にほど近い場所に風神社という古社があります。神社の由緒は次のとおりです。

崇神天皇の御代、四道将軍吉備津彦命の中国平定の際、その臣、鼓彦命が雨坪山の山嶺に小社を建立し志那津比古命、志那津比女命を勧請した。後、朱雀天皇の承平５年（９３５）９月９日、現地に移転し風倉大明神と称える。明治２年、風神社と改めた。（平成 17 年４月１日「ひろも今昔物語」行安彼土志著より）

なんと、広面に鼓様が小社を建立していらっしゃるではありませんか。志那津比古命、志那津比女命の勧請は、その後、風倉大明神と称えた時からお祀りしたものでしょう。しかしそれらは残念ながら備前の国での話です。



そこで、風神社の近くにお住まいの氏子、有江さんに鼓彦命が小社を建てたと伝わる広面字雨坪の場所を教えて戴きました。

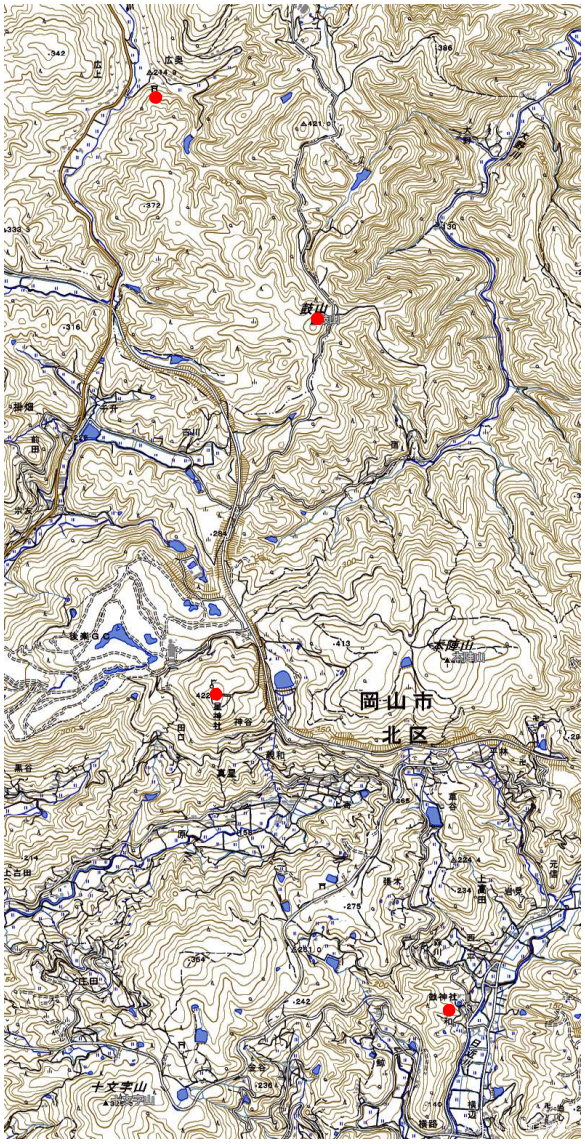
それは、吉備新線（県道岡山賀陽線）と国道４２９号の交差点から南東数百メートルの位置にある雨坪池の東西に広がる区域です。南側は、備中

国（岡山市北区真星）となります。

念のため、明治２３年土地台帳から広面字雨坪１３３筆の土地所有者を調べました。すると、大方８０パーセント以上は、備中国賀陽郡福谷村真星・掛畑の方の所有です。雨坪地区の東端が鼓山（かつての雨坪山）という次第です。これを見れば、国境の線引きに「？」が付くほど、実態はまさに備中の国の様相です。

このようなことから、延長５年（９２７）、延喜式神名帳が整えられた時点では、鼓彦命の小社は備中国賀陽郡の鼓神社とされていたと考えることはどうでしょうか。そして間々ある歴史のイタズラがこの地でも行われたのです。つまり、その８年後の承平５年、神名帳の記載はそのままに、鼓神社は風倉大明神と称え、備前国の現在地へ移転したのです。

郷土史家薬師寺慎一さんは、その著「祭祀から見た古代吉備」の中で、上高田の鼓神社が式内社だとすれば、社の無かった当時の判定基準となったヨリシロなどがありそうなものだが見当たらない。距離が近い真星の星神社が元宮でなかろうかと推測します。この趣旨に従えば、星神社よりも雨坪山（鼓山）の小社こそ上高田鼓神社の元宮であるとも主張出来そうです。



さて今回の結論ですが、留霊臣が逃げ帰った先は鼓山の小社と判定する次第です。打ち捨てた鼓との因縁を物語る鼓山、鼓田の地名の存在、前線から飛び去ること三里余という距離もそれを証明しています。

風神社は元祖防災神

鼓彦命が雨坪山へ創建した小社は、承平５年９月９日、現在の広面奥へ風倉大明神として移転。明治２年、神仏判然令により風神社と改められました。

広面奥への移転の日付に関して、今は余り耳にしない「二百二十日」と言う言葉の意味をご存知ですか。これは、季節の変化の目安とする雑節のひとつで、立春から２２０日目にあたり「二百十日」と共に台風来襲日として厄日とされました。

今の「防災の日」は、関東大震災の発生日、９月１日に因みますが、もともと台風の来襲が多い頃にあたり、災害への備えも怠らぬようにという戒めも込められています。つまり、雨坪の社が風倉大明神として今の地へ移転された日付も大変意味深いもので、以来、防災の神として一千年余の長きにわたり現役で活躍されている訳です。